京都国体の演出（63・12・17）

湯淺　佑一（昭3文甲）

今日は六十三年京都国体ということについてのお話ですが、その演出をしていただきましたのは、我三高出身のお二人で、その前座ということで私、むしろ非常に京都国体が空前の成功を収めたということで、特に関係者の総ぐるみの皆んなの力で以って、皆んなのお蔭で以って成功したということについて、今日、今お配りしましたところに成績が載っております。で、今度は二巡目の一通り、昨年の沖縄県の国民体育大会で一巡目が終りまして、二巡目の国体を京都でやるということで、その担当と言いますか、勿論これ行政の方がおやりになることであったのですが、これをお助けする京都府体育協会長としてやるようにということで、幸いに三高の私共はいつもボランティア精神をもってやるもんですから、自由にですね、相当思う存分なことをやったんですけれども、幸いにして全員が協力して二巡目の国体として新しい歴史を作るという意気込みでやったわけで、それでいろいろその各地域、あるいは学校、あるいは企業、それぞれの団体がいろんな問題をかかえておりまして、非常に環境としてはむつかしい事が、沢山あったのですが、

そういうことは済んでからにしてくれと、とにかくこの六十三年京都国体の総合優勝ということを、我々目標にしてやるんだから、それだけに皆さん協力してもらいたいと、それが済んでからひとつ、大いにやろうじゃないかと言うことで、全部問題を栅上げにしまして、そしてまっしぐらにその目標に向って突進したというだけのことで、その結果が男女総合天皇杯総合優勝、それから皇后杯の総合優勝と第一位になってしまいました。

そこで四千三十三点という、空前の成績をあげることが出来ました。その競技というのは、種類と種別というふうに分かれておりますけれども、競技としては三十九程ありまして、そのうち種別というのは、団体と個人とがございます。団体はご承知のようにバスケットボールチーム、バレーボールチームというような、個人というのは青年の部、満十九歳以上とそれからそれ以下と中学三年生の者は、優秀な者だけは特別な競技に限って、例えば陸上とかそれから水泳については参加出来るというように門をひろげまして、その他一部、二部とかいろいろな二巡目の新しい方式を採用して、新しい得点方法をわかり易い得点方法に変えてやったわけです。

それからもう一つは京都として独特のデモンストレーション・ゲームと言いますか、行事と言った方がいいかもしれませんけど例えば、ジョギングであるとか、ママさんバレーであるとか、綱引きであるとか、そういうような独特なものを紹介して、これに老人の方々のゲートボールも入ります、そういうようなものが、これは各府県でそれを全部の府県がやったわけじゃございま

せんが、京都が始めたものですから逐次それをやろうということになり、これはやがて、また国体の競技の中に加えられるということに将来はなるということであります。

来年は北海道で国民体育大会があり、再来年は福岡県で国民体育大会がございますが、その福岡大会の時には例えばゴルフというようなものが、所謂デモンストレーションゲームとして、恐らく入ってくるんじゃないかと、それがさらに時期がきて、選手権としてやれるようになった時に、その時点で今度は国体競技に加えるというふうなことであります。

京都は全体の三十九競技のうちで三十七迄が総合優勝がとれたという空前の成績を修めたわけであります。そういうふうな詳しいことが皆様のお手元にありますのでご覧願いたいと思います。特にこの大会を演出していただいたのが、今日これからのお二人の講師、我々の同志にお願いをするわけでして、よろしくお願いしたいと思っております。皆様にお礼を申し上げる意味におきましてご紹介をいたします。

菅　泰男（昭11文甲）

前説明の第二としてひと言申し上げます。私は昭和十一年文甲卒業で、前知事の林田君と同級生ですが、スポーツには何の関係もございません。ただ三高の時は弓道部をちょっとやっただけで、天下第一のヒョロヒョロ弓を引いておりました。私をご存じの方は「アレが国体に何の関係

があるのだろうか」とおっしゃるに違いないんですが、全体の委員長湯浅さん、その下にいろいろな委員会がございます。そして開会式、閉会式の段取りをするのに、式典委員会、林田君が知事でしたからその関係もあったと思いますけれども、その委員長をやれといいますのは、私は山修の弟子で三高の時に文芸部とか、演劇、映画研究会とかをやっておりましたので、それで演出を考えろということでありました。そういうことのまとめはさせていただきましたが、実際に、それをやってくれたのが近藤公一君、岩田正君であります。しかし今度の国体で一番功績があったのは湯浅さんですが、私共は八歳程下だと思いますが、私のクラスは林田君、多少柔道のことで龍村基雄なんぞも同級生ですけれども、それも多少関係したかと思います。ご縁を申せば湯浅さんの後を引き受けて、公安委員会の委員長を引き受けているのが、私のクラスの小林弁護士ですから私のクラスは大分関係があったということです。一言いらざることを付け加えさせていただきますが、林田君は非常によくこのために尽されました。ご存知と思いますけれども、そもそもこの時引き受けた知事であった訳ですが、それから後、法務大臣になりましたが、しかし国体はどうなるかということで皆さん少し問題でないかなあと、つまり陛下のご病気ですね、思っておりました時に林田君が尽力をして無事にやることが出来た。これは大変結構なことだと私は思っております。実は私は大阪の国際児童文学館、民博これも三高の梅棹君が館長をしております。それの隣でございます。日本で初めての児童文学の研究館でその館長を勤めていますが、三年程

前に陛下にお出いただいて、その時私、感心したのは、陛下がそこにいた子供たちに非常に柔らかいご視線でもって、大変お元気でした。何度も声を掛けて下さって、そういう方でございましたので、私は国体をやったことが陛下にはお気に入っているに違いないと思います。始めの頃、ちょっと体裁的な自粛が過ぎていたのに、京都国体をやったことは、結局は陛下のお気に召すことだと思いますし、立派だと、それに決断をつけたのは林田君だったと思います。同級生の自慢をしておきます。その開会式、閉会式ですが、これは各方面の方々の学校の先生ですとか、各団体の方のご努力があったのですが、これを見事に演出して下さったのが湯浅さんから私が八年、私から十二年経ってこのお二人、こういうことであります。岩田さんが演出の大きい部門を引き受けて、もうひとつは実はスポーツ芸術というのがありまして、これをやるのだと、府の方も「スポーツ芸術とは何ですか」と私、ご相談に与かったんですが、いろいろ考えまして、ギリシャのオリンピックの頃から、スポーツと共にそれを反映する芸術活動というものが、もともとの主旨だったわけです。そのスポーツ芸術というのを何とかまとめようと、いろいろ工夫しまして、スポーツ芸術の委員会を作り、近藤君に委員長になってもらいました。私も委員を務めましたが、それが非常な成功をいたしました。もっぱら近藤君の力です。そのふたつの開会式、閉会式の演出、スポーツ芸術の演出と非常に功績のあった二人のお話を聞こうということであります。ちょっと前説明の第二としてご紹介いたしました。

近藤　公一（昭24文乙）

ご紹介いただきました近藤でございます。三高生といたしましては最下級生、昭和二十四年文乙の卒業であります。今、このようなお仕事を引き受けたり、今日こうしてお話をしたりするのも、やはりその出発点は私にとりましては三高であります。子供の頃は戦争中でありましたから、野暮ったい軍国主義教育を受けておりましたけれど、丁度終戦の年に三高に入りまして、「まあ、それまでよく嘘ばかり教えてくれたなあ。」という気がした世代でありますので、本当に人間らしい教育を受けたのは三高に入ってからでございます。しかも驚いたことに、あの記念祭で、今お話をいただいた菅先生はじめ山修さん、フランス語の伊吹さん、ドイツ語の古松さん、この四人が学生達と同じように森本薫の本読みをおやりになる。「へぇー先生方も芝居しはるのか。」ということでありまして、それは非常に新鮮な思い出でありました。尚、私はこれからお話いただく岩田君と同期でありますが、当時ゲルマニア協会というドイツ語の好きな連中がやっている会がありまして、それもまだＡＢＣ（アーベーツェ）習ったばかりですのに、あの歴史家であります萩原延寿が三年におりまして、こともあろうにフリードリッヒ・シラーの「群盗」Räuberをドイツ語でやろうという、紀年祭で。この「群盗」という作品は主役級の外に題名の通り群盗といって、沢山その他大勢がいるわけで、その、その他大勢に引っぱり出されて、それがそもそも芝居を実際にやり

出す第一歩でありました。で、その時たった一つ貰った台詞は、やはり今だに忘れることが出来ませんで、主人公のカールが世直しとかいって、山賊の仲間に入って最後にこういうことは神様のなさることであって、私達のすることではないと自首して出ようとする最後の場面で、私その他大勢の一人として、萩原延寿の主人公カールに剣をつきつけて、「お前の空高く飛ぶ計画は何処へ行ったのだ。」ということをドイツ語でいうわけです。“Wo sind deine hochfliegende Pläne?”この台詞は今だに忘れることは出来ません。そしてこの年になりましてここでは最下級生で誠に口憚ったいのですが、私、最下級生も六十を越えております。で、正に今頃「お前の空高く飛ぶ計画は何処へ行ったのだ。」という台詞は折々、甦ってまいりまして、何ンとも……お恥かしい限りであります。そういうことで、その後、芝居をいろいろ京都でやり出しまして、勉強しているのか遊んでいるのか分りませんが、いろいろなことをやりまして、岩田君とも若い時から、ずっと一緒にやりまして、今頃は若い人に芝居を教えたり演出をしたりということでございます。今日も先輩としてそこへお越しいただいている田代さんは、文化芸術会館の館長さんとしていろいろお世話になりましたが、あるいはまた、先輩山田さんも今国体のことでいろいろご尽力いただいているわけですけれど、芝居の面では菅先生が私にとりましては恩師であります。その菅先生のご下命でこのような仕事を引き受けることになりました。私の思いといたしましては、今、スポーツというものは大変盛んでございます。湯浅会長のご努力によって、このような

立派な成績が上って、勿論私共大変喜こび、誇りとするところでありますけれども、もともとスポーツもプレーでありますが、私共の分野の芝居もプレーでございまして、子供が遊ぶのもプレーでございます。英語の先生の前で妙な英語の発音をしますと、又怒られますけども、ドイツ語のシュピーレンもそうでございます。スポーツの方は割合い健全な健康なものでありますし、私も勤めは同志社大学でドイツ語を教えているのですが、学生諸君のさまざまなクラブ活動にも関係いたします。スポーツは私これで同志社大学のフェンシング部部長を勤めております。直接は何も出来ませんけど、学生諸君とふれ合って大変いいもんだと思うのです。一方演劇関係とのグループとも接触しますが、ここに非常に大きな違いがございます。スポーツ関係で特に私立大学のスポーツ関係でいいなあと思いますことは、先輩と後輩の連がりというのが、非常に密接でありますね。で先輩諸君が段々と偉い人になり、お金も出来るとなりますと本当に喜んで現役の学生諸君に、心身、物心ともに援助します。技術的なコーチ、その他も先輩は無償でやります。お金も出します。何かというと非常に熱心にコンタクト。で少なくとも私の知ります学生スポーツといいますものは、そういうOB先輩諸君の物心共にする援助がなければ発展しないということを痛感いたしました。若い人達だけでは出来ないことが、そういう非常に大きな力で出来るということを兼々、承知しておりましたけれど、国体につきましてもあの五日間の国体のために、こないだ最後の実行委員会へ伺いまして、実に十年間の準備が積み重ねられ、実行委員会の名簿を

見ますと、本当に京都府のあらゆる市長さんや、村長さんや、重要な組合や、協会の理事長さんや会長さんやら、偉い人全部寄って、あの実行委員会はまるで府議会かなんかみたいですね。それ程、沢山の力で出来て、小なりと言えど、私の直接体験いたしますあり方と同じだという感銘を非常に受けました。

それに比べて、文化関係というのはこれはどういう訳でございましょうね、先輩達は若い時は一生懸命やっていたくせに、ちょっと齢をとると、またお金が出来ると「あれは若気のあやまちで」という感じで、現役の若い者は次々と芝居をやりたがりますけれども、これ芝居をやるというのも、これ大変お金もかかりますし、時間もかかるし技術も要りますし、総合芸術と言われるように文学の研究からですね、装置を造ったり、体を動かしたり、音楽をやったり、それには長い時間をかけて準備をしたり、稽古をしたりするわけです。これもスポーツと同じ位大変なことです。ところが先輩諸君はどれも援助をしようという姿勢は皆無といってもいい。私、永年そういうことに関わってきて、今やより若い世代のそういう人達も、沢山いるわけですけれども、若い時あれだけ熱中しておっても、ちょっとと思っても、今言いますように「あれは若い時の若気の過ちでございます。」となると、三高で芝居やり出して五十、六十になって、まだ芝居やってるというのは、よっぽどアホと違うかということになります。

ところで、その芝居、演劇というものにつきましても、社会的な評価というものが、やはりま

だ非常に片寄っているというふうに、私共は思うわけでして、日本ではどうしても喜怒哀楽を中心といたします、情緒的な男女、親子の義理人情のといった、そういう情緒的なレベルでの涙と笑いというレベルでしか、お芝居というものは一般には理解されておりませんが、私共、先程お話の山本修二先生。この山修先生から、菅先生を通じ、教わった演劇の理念というものは、そんなものではないわけです。それも含みますけれども、演劇というのはもっとそれ以上のことが出来るということを教わったつもりです。伊吹先生にせよ、古松先生にせよ、又私共のゲルマニア協会では、内山先生はじめ、あの三高には木当に優れた演劇学者が沢山お出でございました。内山さんも私にとっては恩師ですけれども、博士号のお仕事は、ドイツ中世のハンス・ザックスというように、バロック演劇研究の大家でございます。日本で有数の業績を残されて、それが博士論文となっております。けれども、そんなもの一般にはほとんど知られてはいないと思います。私は忘れられないのですけれども、その博士論文が紀要の形で印刷になった時に、お宅へ伺った時、先生が「これ、ちょっと出来たんだけど、こんなもの読んでくれる人いないと思うんだけど、近藤君……」といわれて頂戴をいたしました。私はこれ又、忘れられないことでありまして、その時のこのお仕事だって大変なお仕事でございます。しかもそれ非常にはずかしそうに、これはまた、私が三高の一つの精神（エスプリ）として学んだ忘れられないことのひとつでありまして、芝居というと、何か派手な、出しゃばりのそういうところ無きにしも非ずですけれども、しかし内山先生の

その時のシャイなちょっと恥ずかしそうな、これ山本先生にも菅先生からも教わったことでして、何にもそんなもの言葉として、お説教として聞いていませんけども、羞恥心のない演劇などというものは僕は信用出来ないというふうに思っています。それでもそういうこともすべて、三高の先生方から教わったことであります。

それから今、たまたまこうしてこの仕事、ご一緒することになった岩田君につきましても、そういうわけで三高時代からその後、京都で苦楽を共にしてきた仲でありますけども、その他にも当時、今梶川君もお見えですけれども劇研がありましたし、その他にもドイツのゲルマニアの他にE・S・Sのグループもありました。それからフランス協会がありました。全部原語でやりました。そういうことが少なくとも私が三高へ入りました頃、新風土というか、文化風土といいましょうか、大変そういうところで、私、結局幸せであったと思います。

前置きが長すぎて申しわけございません。けれどもやはり私は、先程菅先生おっしゃるように、スポーツ芸術競技って何だ、ということが先ず最初の委員会では二回も三回も、定義づけで、ちょっとお配りしました資料でも、いちいち申し上げませんけれども、立派な先生方と先ず概念はやっぱり考え方がきちっとしていなかったら、それこそこういう大きな仕事でありますし、大勢の方々に協力をお願いしなければなりませんから、基本的な考え方がぐらぐらしてたら、その都度、その都度説明してたら大変であります。だから出来るだけ考え方をきちっとまとめてと。実

は歴史的には先生のおっしゃいますように、古代ギリシャのオリンピックというのは、スポーツだけではなくて絵画でありますとか、建築でありますとか、音楽でありますとか、またギリシャ悲劇、これ厳密に言いますと、ちょっと違うんですけれども、そういうような事がいろいろ一緒に行われたわけであります。ご存じの通りクーベルタンも又、近代オリンピックを再開するに当ってそういう理念を持っておりました。けれどもこれはすぐには実行出来ませんでして、数回後からちょっと細かい資料持って来ておりませんけど、何回目からか、そのスポーツ芸術競技っていうものが実行されるようになりまして、最初の段階はやはり同じように美術分野ですとか、音楽分野ですとか、競技として一位、二位、三位ということを決めたんですね。その間「芸術新潮」という雑誌がその問題をかなり大きく取り上げておりまして、私もそれを見て初めて知りました。若き日の梅原龍三郎でありますとか、かなり大家ですね、この方々がそれに応募して、優勝ってのはないんですけども、二位、三位というところで、かなり日本の画家がそこへ応募している事実を知りました。

ところがやがてオリンピックではそれを競技とするということは、ちょっと無理ではないかということになりまして、オリンピックの機会にこれはデモンストレーションとしてやるということになったようでございます。私たまたま、ミュンヘンオリンピックの直前にドイツにいたことがありましたもので、いろいろ準備状況も断片的に承知をしておりますが、その時、ミュンヘン

のオリンピックの時も関連して、芸術部門のデモンストレーションが盛大に行なわれておりました。ヨーロッパではドイツですけど、ちょっと声かけたら近隣諸国から、フランス、イタリア、イギリス、ロシアとかいうところから全部来ますから、かなり高度な芸術的エキジビションがオリンピックの行事として、登録されていて立派なカタログが出来ておりました。その理念が、精神的にはオリンピック精神というものが、やはり国体の精神であると私共は考えました。やはり日本の国体の制度の中に、スポーツ芸術協会というのがあって、いろんなことおやりになっているということもお聞きしました。これは担当の府の文化芸術室の方が直接東京へ行っていろいろ聞いて来られたんですけども、残念ながら、実際のことはあまりよくわからないということで、府のお役人さん達もどうしたらいいのか、何やるのだということになる。では少なくとも今までの先催県ではどういうことをされていたのかということになり、私共現にこのことをおおせつかって、一年前沖縄の国体はその面を見せてもらいに行ってまいりました。

実際はですね、やはり郷土芸能祭的な催しなんですね、簡単にいって。沖縄の場合なんかは私共にとりましては、沖縄の踊りとかお芝居とかいったようなものは、大変エキゾチックなもので、御存じの通り沖縄固有の文化というのは中国系、それから南方系、それから大和日本と。本当にミックスしておりまして、私共としては拝見している限りは大変エキゾチックなおもしろいものではありましたけれど、本質的にはやっぱり地方芸能祭ということにとどまります。菅先生が

「あの盆踊り大会みたいなことだけはやめとけよ」と最初に仰せになりましたもので「はあ、はい」と思いました。そして沖縄を拝見して、この沖縄というところは、全自治体から代表がいろいろ出て来るとしても、各離島の島ですから、非常に特徴のあるものが出てまいります。けれどもただそれが、はい次、はい次、はい次という感じで、並べられているだけでありました。

一方で菅先生が単なる盆踊りはあかんで、とおっしゃった。国体というのは一つのフェスティバルでありますから、出来るだけ多くの方々に参加していただいて、フェスティバル、即ちお祭りとしての性質を持たなければならない。一方、京都ということがある。それからスポーツと基本的には、私は芸術っていうものは、さっきも申し上げるように基本的に人間のやることとしては共通している。だから結局、そこへいずれかの物に印刷をしておきましたように、一つはスポーツそのものを題材として、絵とか、彫刻とか、写真とかですね。スポーツそのものを芸術の対象としているもの。それから第二にスポーツそのものが具象的に表わされてなくても、スポーツの持つ本質、たくましさでありますとか、速さでありますとか、強さでありますとか、跳ぶということとか、走るということとか、投げるということとか、そういう抽象的なことをアブストラクト形式でも、やはりこれは今日、絵画の対象にもなりますし、音楽的にも音楽性というものはスポーツの運動性というものと共通したところがありますから、そういうところに接点を求める芸術。それから三つ目にやはり京都でやるんだから、何か京都ということですね。というような

ことを芸術的にという考え方。特に芸術の部門の中でも、パフォーマンス・アーツは身体芸術でありますから、今申します俳優さんの修業にしましても、歌を唱う方の修業にしましても、これスポーツマンと同じ訓練を長期にわたってするわけでございまして、俳優さんは、なよなよしているようですけれども、今度日本舞踊も参加していただきましたけれども、その日本舞踊の方の後でおっしゃられることでしたが、本当にスポーツとああいう静かな舞踊の場合でも、基本は人間の身体であって、それも特に腰である。足腰ということが結局人間の動きの基本になります。その点につきましてはスポーツもパフォーマンス・アーツも全く同じであります。そういうふうなことをいろいろ考えて、さて理屈ばっかり言っていたらあかんので、実際にやらなあきませんから、そこで実はお配りしておりますもの、このビラの様に具体的にはいろんなことやりましてございます。

事業としては大きく、文部省、京都府共催によるところの主催行事というものと、それから、これを機会に民間の自由な協賛事業というものとに大きく分けて、そしてそれぞれの財政的な裏付けも必要でございますから、やりました。これいろいろ申し上げてると時間が経ってしようがありませんので、その中で実は岩田君の方がメインなんですけれども、私の担当いたしましたのはその前夜祭のような性質を持ちまして、このリストの一番上に出ております、スポーツ芸術フェスティバルというものをやりました。あとはですね、それぞれお能ですとか、バレエですとか、

あるいは展覧会ですとか、いろいろな主催者にお願いしてやっていただきました。

このスポーツ芸術フェスティバルというものだけが、私共の委員会が自前でやった行事であります。私といたしましても、全体的に実際の仕事は文化芸術室がおやりになりますので、委員会として先生方にお計りしたり、決めたりしてということでありましたが、このフェスティバルにつきましては、ちょっと提案をいたしましたら、その話を決めてお世話するというだけではなくて、企画・構成・演出という、どうも一人で何もかもというのは、恥ずかしいんですがさっきの話で。恥ずかしいのですけれども、いろいろな事情でそれを引き受けました。それがちょっと大層なパンフレットになっておりますが、スポーツ芸術フェスティバルというものでございまして、京都にはさまざまの芸術分野がありますので、その方々に出来るだけ、能・狂言・日本舞踊といった伝統芸能から、今日のジャズダンス、ボディビル、新体操等、現代の若者の姿に至るまで、少しずつ京都で今、一生懸命やっている方々に出ていただこうということをひとつ考えました。それから、さっきの沖縄体験からして、ただ、はい次、はい、次と並べているだけでは芸がなさ過ぎると思いまして、たまたま今回の京都国体のテーマが「新しい歴史に向って」ということでありますので、一応、京都の歴史というものをその流れに沿って、そしてそれぞれの適当なパフォーマンスをやっていただいたらどうかという考え方をいたしました。

そこでこのパンフレットの一番最初の目次のところに、その順番を示してございますけども、さっき申しましたように、国体の精神がオリンピックから始まっているという考え方を、先ず最初プロローグとして、オリンピックから京都へということで。具体的に申しますと、もともと人間が野蛮に戦い合っていたその戦いがゲームになるというプロセスを、最初に持って来たかったわけで、幸いボディビルをやっていた連中とか、逞しい半裸の男達が無茶苦茶けんかしておる、その中へギリシャの女性達が割り込んできて、おやめなさい！その戦いをゲームにしましょうということで、ここで聖火を示すような、火を灯してもらいまして、さあこれからオリンピックゲームの始まりだというふうにして始めまして、そのギリシャの衣装を着ている何人かの女性達にはそのオリンピックが京都へというところを視覚化するのに、この頃流行の、実は京都で頑張っています市田ひろみさんが、ニューキモノなんてなものを盛んにやっとります。それを下に着ておいてもらって、パッとギリシャの上着を脱ぎますとニューキモノ、そのニューキモノを着た女性達に、こともあろうかモダンジャズダンスを踊ってもらって、それが今、ギリシャからタイムスリップして京都へ来たんだという考え方。そしてそのあとで京都はやっぱり着物。ちょっと今回の京都国体いろいろ着物をこの際使おうという知事さんの提案もありまして、そしてその後、和服振興協会のお嬢さん達が三十人程、振袖姿でずうと出て来てもらうという形で、プロローグを始めました。ちょっと最初だけどんなふうに始めたか、いずれこれ、おまわしいたしますけれ

スポーツ芸術フェスティバル

■

新しい世紀に向かって
未来へのメッセージ
スポーツと芸術の
クロスオーバー・パーフォーマンス

(プロローグ)
オリンピアから京都へ
オリンピアから京都へのタイムスリップ

(1幕)
古代の夢 飛鳥から京へ
現代舞踊と古代文明

(II幕)
平 安 京
平安風俗の華麗なる美

(III幕)
もののふたちの栄枯
戦国時代絵巻

(IV幕)
中世の光と影
能・幽玄の世界

(V幕)
洛 中 風 物
狂言の笑いの中の京町風俗

(VI幕)
京 舞
華麗・優美・京舞の世界

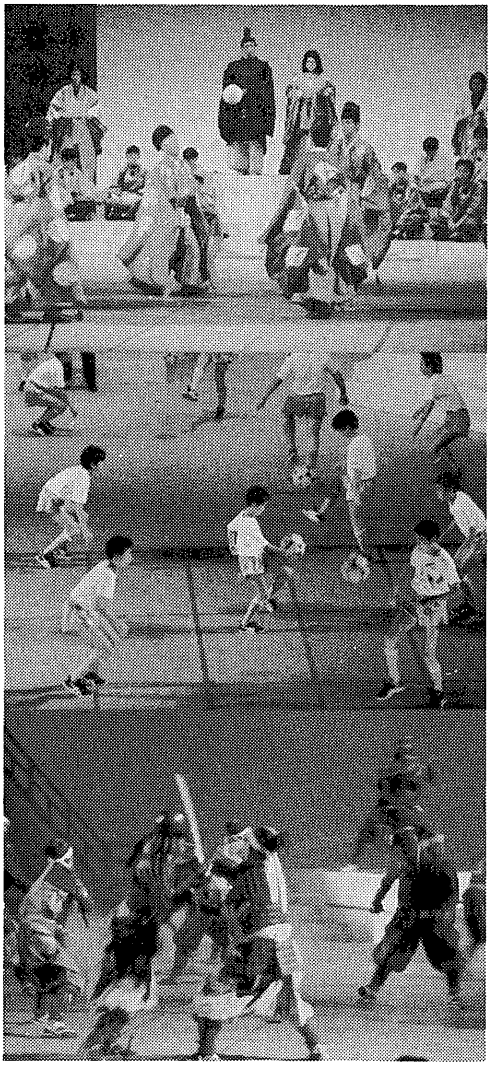
(VII幕)
文 明 開 化
近代から未来・ファッションムーブス

(VIII幕)
今 若 者 たち は
先輩・若者たちの躍動性

(エピローグ)
21世紀は私達で "エランビタール"
美しき未来へのメッセージ

ども、ビデオもあるんですけど、あれをやっていると長くなって仕方ないので、こんなものやということだけを、このアルバムまわしますので御覧下さい。

その後、簡単に申し上げますと、結局平安建都千何百年というのが間もなくまいりますけども、都は奈良から京都へ来るわけでして、第一景は古代の夢ということで、これまた、たまたま菅先生との御縁が深く、京大を出ておられます神沢さんという方が、文字通り奈良で創作舞踊研究所というのを作っておられまして、お願いしまして、奈良から京都へという場面を現代創作舞踊で示していただきます。それから平安時代に入りまして、平安時代といいますと、やはり十二単衣ということになります。京都には井筒風俗研究所というのがございまして、あすこの社長の弟さんがこれまた三高なんです。今申しますゲルマニア協会で一緒にドイツ語で芝居して、今大阪ガスの専務か何か偉い人になっていますが、これも忘れもしませんで、ここでの集まりで久しぶりに顔合わして「実はこうこうで、お兄さん助けてくれへんか」と言ったらすぐ電話してくれて、何かスイスへ出かけるその前の日でしたけど早速にお兄さんに会わしてくれまして、あすこの十二単衣その他を拝借することが出来て、それを目の前で最後の着付をしまして、それから平安期ということになるので「けまり」、けまりも保存会が京都にございます、ところがこれは神事でありますので、あんまり安直にそんなものを舞台の上で見せるというようなことは具合悪い、けれども何度もお願いをしてお許しが出ましたが、神事でありますから、いろいろ手続きがあるん



です。いきなりボールだけ蹴ってくれというわけにいかんので。最初にいろいろ儀式があるわけで、でもそれ全部やってたらえらいことになるんで時間が。何とか縮めて頂いて……。そして国体の行事でありますから、そんな歴史だけやってるんではおもしろくないので、未来君というのが、シンボルマークになってますように、それにスポーツの源流と現代の若者達のスポーツとい

うのをクロスさせようと思って、少年サッカー団の連中に協力を求めまして、最初は井筒さんのところから借りた水干を着せて、最初はけまりを如何にも見物をしているみたいに座らせといて、終った途端に皆んなパーと脱ぎ捨てたら下にサッカーのトレーニング・ウェアを着てると。それが出て来てボンボン、ボンボンと現代式のサッカーの球を蹴るという形で進行させまして、やがて「中世、もののふたちの栄枯」と題しましたところは、これまた幸いなことに京都には、東映という得難い存在があります。これもプロの集団でございますけれども、コウコウカクカクシカジカ……是非協力を願うということで、チャンバラ集団二、三十人出てもらいまして、このギリシャの時と同じ発想で、最初チャンバラなんていうものはテレビや映画、芝居で見るような格好ええもんと違うはずで、まあ、例えば黒沢明の映画なんかには、そういう姿が描かれておりますけれども、出来るだけ無茶苦茶殺し合いしてくれと、その中からやがてものの哀れ、はかなさを知った武将が――これ芝居というのは、早変りというのはなかなかおもしろいもので――ブワーとしたら下に坊さんの格好しておいてもらって、供養をする。そこへ今度は、礼儀正しい少年剣道団のご出場をお願いしまして、そういう無茶苦茶の殺し合いのチャンバラから、やがて礼儀正しい、その仏教思想を経て、武道というものが生まれるというふうに運びまして、そしてやがて平和な世の中になって。その前にその中世の武道ということ。仏教から武道、そしてそれが美学的に美事なお能となります。

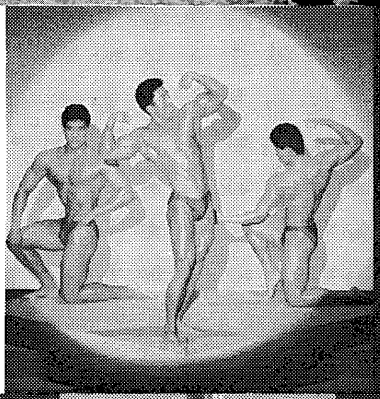
〈Ⅳ景〉
中世の光と影
〈Ⅶ景〉
文明開化

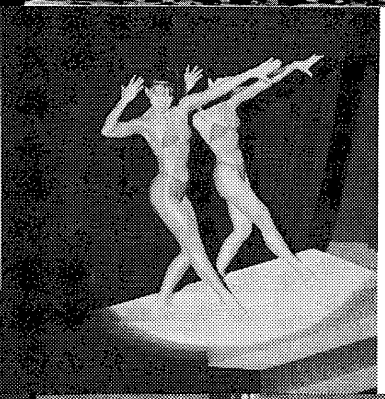
金剛さんの御子息の永謹さんにお願いをいたしまして、これは菅先生は金剛さんのところでは大変指導的なお立場でございますので、お願いをいたしまして、船弁慶、長刀を持って見事な舞をなさいますところを舞ばやしでやっていただきました。そして今度は、それをお願いしたのも長刀でありますから、これは今度は少女のなぎなた団にお出ましをいただいて、少女なぎなた団の演武という形で非常に伝統的なものと、それが現代につながっているという形をクロスさせて行きました。そして江戸時代に入りますが、その中間点にあんまり硬いものばっかりでは……というので、茂山さんに狂言をお願いいたしまして、室町小歌をお願いしました。千之丞さんが大変乗り気になって下さいまして、こういう趣旨をよく理解して下さり、大変楽しい場面を考えて下さいました。お子さん達とお社中が、五人出ていただくことが出来ました。

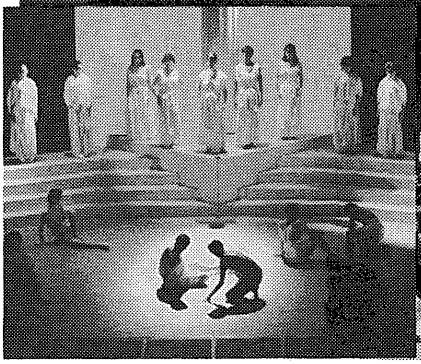
そして江戸時代となると京都では日本舞踊は、たくさんいろいろお流儀がございますけども、やっぱり一番代表的と思われます井上さんの方にお願いをいたしました。石橋をこれ最初八千代さんが国体でおめでたいので石橋が結構ですねと、おっしゃっていただいて、さっき菅先生もおっしゃっていましたように、ちょっとどうなるかという局面がありましたので、石橋はお祝い事やから自粛せないかんのかというようなこともあって、ちょっとしばらく悩んだり、相談もしたりいたしましたけども、とにかく予定通りやりなさいということになりました。

そして時代は文明開化、明治ということになりますけども、その時代の移り変りを、バックに

明治初期の錦絵のスライド等を写しまして、そして若干この頃は昔からの時代祭から、更に西陣の方々が音頭をおとりになって、それ以後の現代風俗の時代祭ということをやっておられるのですが、これはいろいろな都合であまりたくさん出てもらうことが出来なくて、ちょっと時代変りましたよという程度でパレードしていただいて、そして現代に入りまして、今、井筒さんが理事長されております成安女子大から、未来のファッションショーへというところへポンと飛びます。本当は出来たら明治時代に入ってからのスポーツの、ファッションの変遷ということ、やりたかったんですけども、これなかなか資料あるんですけど、物がないのでそして、それを作るということも、もう時間的にも無理で、結局未来のスポーツウェアーというところへ一足跳びに飛んでしまいまして、これは若い方々の本当に自由奔放なお遊びと言えばお遊びなんですが、そういう場面、そしてその後現代の若者達ということで、尚今日まだ国体の種目には入っておりません、ボディビルでありますとか、それから新体操は入ってますけども、その二軍はまた、これなかなか二軍と言っても立派な連中がおります。それからジャズダンス。ジャズダンスというのは、本当にスポーツそのものみたいなものであります。そういうスポーツと芸術の接点にあるようなパフォーマンス、舞台芸術をバーッと出ていただきまして、最後は文字通り、新しい歴史へということで、少年少女諸君のスポーツ団の連中に、またここでワァーと全部出てもらいまして、フィナーレという形をとりました。







その間、俳優の近藤正臣というのが、これまた若い時ちょっと一緒にやっていた縁もありまして、今たまたま神戸で変てこな忠臣蔵をやっておりますんで、ちょっと声かけたら、喜んでということで、司会・狂言まわしを引き受けてくれまして、その娘さんの川口ひみこというまだお若いお嬢さんと二人で、親が子に語って聞かせる京都の歴史というふうなことで、今申し上げました場面の転換の間に出て来て二人でしゃべる形で狂言まわしの話をやってもらいました。

うわっ面の話ばっかりで誠に申し訳ございませんが、むしろこれから岩田君のおやりになる本番としての、開閉会式の本番の、それの私は前座を相勤めましたような次第でございまして、ただひと言、今大きくポスト国体ということが今後の課題となっております。この機会に京都府下各地に立派な施設が出来た。そして立派な成績も上った。スポーツというのは、やっぱりそれきりでは意味がないと、あとその施設を生かし、そしてこの経験を生かし、いろんなハウ・ツウーということを生かしてですね、スポーツというのは元々、トップレベルの優秀な人たちだけのものではない、やはり府民全員、すべての人がエンジョイすべきものだということを言ってもよろしゅうございますね、そういうことに今後京都国体をきっかけにして、盛んになることを願って、私共の畑といたしましては、どうぞこの機会にスポーツ大いにやっていただきたいんだが、文化面につきましても、何分にも。これ幸いなことに、京都府の文化芸術室及び国体の担当者の諸君にも、スポーツ芸術って、最初「何でっしゃろ、どないしたらよろしいやろ」というところから、

まあ一緒になって苦労したお蔭でこれは大変おもしろい、今後共いろんなことやりましょうというふうに言ってくれたことが、唯一、最大の私の喜びであります。

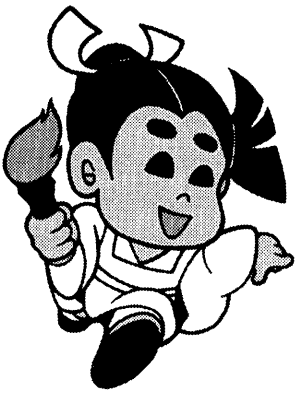
この機会にスポーツと共に演劇分野にも皆様方のご理解が得られて、広く、盛んにと願っております。商売でやっている商業資本の興行界の……あれだけではちょっと淋しいと思うのであります。最初申し上げますように、私達が三高で学んだそのことによって、人生を考え、世の中を考え、社会を考え、歴史を考えするところの、楽しみながら学ぶという演劇、これが盛んになることを、私はポスト国体の課題と、その為に今回ご理解をいただく為にも、頑張ってみた値打ちがあったと思っております。

菅先生はじめ先生方のご指導にこの際改めて厚く御礼申し上げます。

岩田　正（昭24文乙）

私の仕事と申しますといろいろなイベントの企画、それの組み立て、演出、その進行といったようなことでして、あくまで裏方、皆さんの前でお話しするというようなこともございませんが、半世紀ぶりにめぐってきた二巡目初回の「京都国体」を演出する機会に恵まれましたので、自分の仕事をふりかえることによって、国体なるものを少し考えてみたいと思います。

この話を受けましたのは昭和六十年の秋でした。国民体育大会が昭和二十一年に京都を中心に



シンボルマーク『未来くん』

開催された第一回以来、全国の都道府県を一巡して、二巡目初回がいよいよ三年後に再び京都で行われることになっている、ということでした。二巡目ということで各方面から注目されている、ついては従来とは異なった演出で、京都らしさをアピールするためにお知恵を拝借したいという、京都府からの話でありました。

しかしながら国体なるものに私は今まで関与したこともなく、知識もございません。強いていえば、中学時代、明治神宮奉讃体育大会というのがありまして、その予選に出たことがございます。これが現在の〝国体〟の前身だったようです。スポーツといえば、三高では庭球部に所属しておりまして、最後の一高戦を戦いまして永久勝ち越しに多少貢献できたという、まあその程度のことでして、〝国体〟なんていうものには全く門外漢でありました。

翌る年の昭和六十一年一月、最初の委員会に出席いたしましたら、菅泰男先生（昭十一年文甲）が委員長席においでになって、それから近藤公一君（昭二十四年文乙）も委員に入っているっていうようなことでした。またこれは体育協会が主催しておりますが、そのトップが湯浅佑一先輩

（昭三年文甲）であり、林田悠紀夫知事（昭十一年文丙）が京都国体実現への道をつけられたということ、更には夏季国体の会場になった宇治の太陽ヶ丘には山田泰造先輩（昭二十二年理）がいて、いろいろ面倒を見ていただいたことなど考えますと、なんだ三高が京都国体を動かしてるんじゃないかというような感じでして、諸先輩のためにも是非とも成功させなければというような気持になった次第です。特に菅先生は、劇団での芝居づくりの上でいろいろ御指導いただきましたし、大学の卒業の際には卒論に目を通していただいた恩師でもあります。

専門委員会の構成メンバーと申しますと、先催県に準じて、国体を組み立ててゆくために必要な人材を網羅して配置するというような形ですので、九十パーセントまで教育関係やスポーツ関係といった方々です。二巡目の国体の課題として、競技の方にもいろいろと注文がつけられたようでした。私は競技の方はあまり関係がないのですが、採点方法とか参加資格とかかなり改革が行われたようです。同じように式典についても、かねがねマンネリ化ということがいわれておりまして、毎年開催するたびに、新聞紙上でかなり厳しく批判されていたようです。教育と国体とのつながりはどうだとか、国体の名のもとに生徒を狩り出して教育を阻害しているのではないかといったような指摘がされていたようで、二巡目国体にとって、改革路線が第一の命題とされていました。

いざ委員会が開かれますと、小学校や中学校の校長会の会長さんや、教育委員会の方々など、

いわゆる組織を動かすための人々の集まりということで、具体的な組み立てに対する案というものがなかなか出ません。そういった方々は、従来の国体を充分ご承知の方々ばかり。かえって知りすぎているがために、永年その中につかっておられるとどう改革していいかわからないというような感じがいたしました。そんな空気のなかで、こんなことも考えられますよという叩き台のつもりで案を出したところ、それで行こうというようなことになってしまいました。

国体には分厚い開催要項なるものがありまして、このスポーツ大会が非常に精神的なものが中に入った行事であり、国民的祭典であることが縷々述べられています。その建て前はわかりますが、煎じ詰めれば一つのイベントであります。私はイベントを組む場合、どういう目的で、何を訴えんがためにこれを組み立てるんだ、そのためにはどんな演出が効果的かというような考えで常々仕事をしているものですから、国体もそういう捉え方で考えたわけです。

何を訴えるかということについてはテーマとスローガンがあります。テーマはずばり「京都国体」、〝京都らしさ〟をうち出す必要があります。そして「新しい歴史に向って走ろう」という立派なスローガンが、すでに二年程前から掲げられています。スローガンがあるならば、それをいかにして表現し、訴えて行くかということが、このイベントの一番大きな課題であります。「新しい歴史に向って走ろう」ということを考えるためには、やはり過去の伝統を振り返ることも必要であろうし、現在を確かめることも大切であり、その上に立って未来への展望を開くという構

成でスローガンを訴えて行こう、そんな発想を基にまとめたわけです。

過去、現在、未来の表現をいかにするか……歴史の流れということの象徴には、〝川の流れ〟というのがふさわしい、伝統を亨け継いで流れて行く悠久の姿が象徴的に捉えられるであろうということで、まず式典前の集団演技に「川よ、悠久の流れ」というサブテーマを建てまして、そこで伝統の京都の文化の流れを表現することにいたしました。次に式典に入りまして、いま全国から集まってきている若人が大地を踏みしめてスポーツの祭典を行うという意味をこめて「地よ、燃えあがる力」、そしてそのあとに続く集団演技では、未来への志向を果しなく拡がる空で象徴して「空よ、未来に向って」というサブテーマにいたしました。川・地・空で象徴する三部作の構成です。もちろん他にいろいろ意見もございましたが、委員会では近藤君もこの案を支持してくれまして、最終的に菅先生も委員長として、これで行こうと裁断して下さいました。

こうして決定したマスタープランを、いかに肉付けして実行して行くか、それには難しい問題がいろいろ控えております。一つの流れの中に組みこみました式典部門、いわゆるセレモニーの部分は、これを実際に管轄するのは日体協、日本体育協会です。国民体育大会開催要項というのがございまして、こと細かにガッチリと決められています。式典の内容については、従来慣行となっているフォーマットがありまして、これを崩すわけにはいかんという話が出ました。「国体」が十年一日、五十年一日の如く型通りに運営されているのもなるほどとうなづかれます。

私にしてみますと、セレモニーを一つの流れの中に融けこませて、それを盛りあげるために音楽やマスゲームなどを組みこんで、大きな流れを作りたいという構想で組みたてたわけで、そこだけが従来通りの決った形でさわることができないんだということになると構想自体くずれてしまいます。ということで日体協といろいろ接渉をくりかえしました。炬火ランナーや炬火の点火について、あるいは音楽構成などでいままでの形を変えて、流れを盛りあげるようにできました。その間、東京の日体協と国体局事務局との間で、かなりきびしいやりとりもありまして、日体協の力というものは非常に大きなものだなということを知らされたものでした。

こうしてある程度式典もこちらの演出のプランの中に組みこむことができ、一貫した流れを何とか組みたてることができるようになったわけですが、思惑通り行かなかった点もいろいろございます。実は、一番最初に考えましたのは、全体をミュージカル仕立てにすることでした。これはしかし、学校や他の出場団体のレベルとか練習方法とかでとても調整が難しくて、実現すれば画期的な規模のミュージカルページェントになるであろうこのプランは実行できませんでした。でも一部、後半のマスゲームの部分に音楽、歌、演技、台詞で組みたてたところに、このプランの面影を残しています。

もう一つは祭典の効果と雰囲気を考えて、開催時刻を薄暮から夜にかけてに思いきって切り換えるという案です。これにつきましては行幸啓の問題もあり、日体協のフォーマットがあって時

間もほぼ決められており、だからいままで考えもつかなかったことでした。それでも、この案を菅先生の専門委員会にかけていただいたときには、歴史は夜つくられるということもある、ましてや神事とかセレモニーというものは夜のものだ、というような議論も出まして、この案をバックアップしていただきました。事務局から内々に宮内庁の意向を打診してみると、天皇行幸に関しては時刻の変更はできそうだという返事がありまして、その点が一番難しいと思っていただけに、これは何とかなりそうだぞという期待を持ったのでした。ところが、これに対しては出場の競技団体の中から強い反対意見がでました。といいますのも、夜開会式を終りまして選手が三時間もかけて丹後など遠隔の競技開催地に移動して、翌る朝早くから競技に参加するということは、選手のコンデションの点で問題があるということです。何といってもスポーツの大会なのですから、そう云われればやむを得ません。

それとNHKの実況中継の時刻の点もありました。正午から午後一時までの中継時刻はちょっとやそっとでは変えられないということでした。NHKの強い影響力というか、NHKに弱い体質というか、いろいろ考えさせられたことでした。こうして最終的には結局従来と同じ、昼間の開会式典ということになり、夜にかけた夢ははかなく消えてしまいました。そういった裏話もいろいろございました。

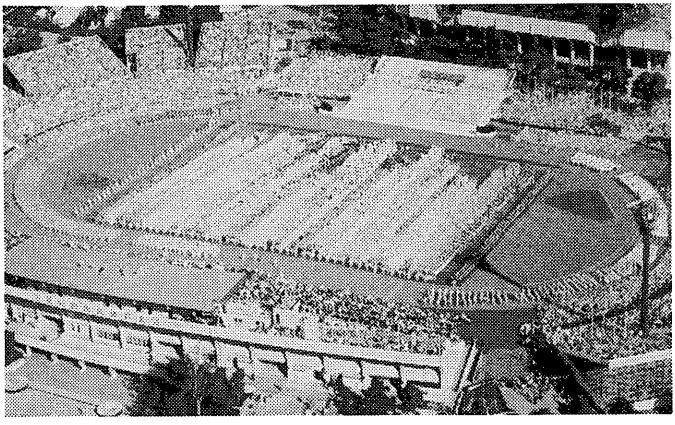
一方では、毎年のように先催県で新聞で批判されておりました、学校行事として扱うことの是

非という問題もありました。京都はご承知の通り、教育の組合関係がいろいろ難しいことがございます。その鉾先を避けるために、教育委員会では大英断をもって参加する生徒、学校を公募することにしました。そうなると、学校単位の人数やレベルのばらつき、生徒の把握、指導の難しさなどの問題が起きてきて、結局は演出、進行への負担としてはね返ってきます。あれこれいろいろ考え合せながら、構成に対する肉づけをして行かなければなりません。

いつの場合も秋の大会が中心になるわけですが、実はその前に夏季大会があるのです。今度の京都の場合は特に、二巡目最初ということで皆が注目している、その国体は夏が幕明けだから、これが全体の印象を左右するにちがいない、だからもっと夏季大会に力点をおいてほしいと申し入れまして、当初夏季大会はつけたりぐらいに考えていた国体局も、夏に力を入れてくれるようになりました。

秋の大会では、陸上競技場の真中の広いグラウンドがその舞台になるのですが、プールで行う夏の開閉会式典はプールサイドで、一部観客席から死角のあるような使い方で従来行われてきました。私たちの感覚からすると、真中のプールこそメインステージと映るのですが、これが全く生かされていません。プールは水泳競技に使うためにあるのであって、その余のことには使えないのだという固定観念でずっときていたようです。

確かに開会式が終ってすぐに競技が始まるわけですから、それに差し支えがあってはいけませ



西京極競技場をうずめる選手団と観衆（開会式）

んが、障害のない範囲でこれを舞台として使うことは、お客さんにも観切であろうし、その方がいろいろ演出が考えられますので是非プールを使わせて欲しいと申し入れました。これも水泳の競技団体の方からクレームがつきました。競技のために初めからコースロープが張られています。これがあるとこちらは何もできません。

演出として考えていましたのはシンクロナイズドスイミングです。水の祭典には相応しいものですが、プールが使えないので従来演出されたことがありません。これに新しいジャンルとして人気のある新体操を連動させて、さわやかな夏の開会セレモニーのポイントにしたいと提案、説得しました。あとの競技のことを考えて、コースロープ一本ぐらいだったらつける時間はあるだろうということで、まず一本外すことに成功しました。ど

うせ外すならもう一本という押しの一手で交渉して二本外してもらえることになりました。こうして、プールの三コースを生かしたシンクロナイズドスイミングと新体操の組み合せという、今まで思い及ばなかった水上の演出を試みることができました。これがきっかけとなって、これからはプールを舞台としての演出が大いに考えられることと思います。

このようにして夏の大会が、会場の責任者である山田泰造先輩のご協力もあって、文字通りさわやかな成功を収めることができました。それがひいては、秋の本番を見直す刺戟剤ともなり、他府県から、二巡目のトップを飾る「京都国体」に、一層の注目と期待を集めることになったのではないかと思います。

時間もございませんので、スライドで記録を追って、その一端をご理解いただきたいと思います。

これは夏の会場、宇治の「太陽ヶ丘」です。大変よいロケーションで、自然を生かした会場です。式典を奏でる音楽隊、鼓隊、合唱団。朝七時、セレモニーのスタートです。天候にも恵まれて、母音だけで歌うボーカリーゼという合唱がさわやかな第一印象です。可愛らしい鼓隊のリズムのあとは婦人団体の演技です。「光に向って」という京都国体のイメージソングを、モダンダンスで、朝日に映えてはつらつと踊ります。従来の民謡調の踊りとは一変した女性の姿です。

つづいて先程申しました、プールを使ったシンクロナイズドスイミングとプールサイドから投

シンクロナイドスイミングと新体操の演技（夏季大会開会式）

げた輪を水中で受けて、水中とプールサイドを一つの演技にまとめる振付は、なにせ中央三コースしか使えませんのでプールサイドとはかなり距離があり、何度稽古してもうまくいかなかったのが、本番では完璧な形で成功したときは、われわれ司令室のスタッフ一同、ヤッタ！　と思わず歓声をあげたのでした。

この当時は昭和天皇もご健在でしたので、式典のクライマックスでプールに仕込んだ噴水を揚げたり、色彩豊かに風船を空に舞わせたり、花火（煙火）も打ちあげました。これも仲々タイミングが難しいもので、従来時計や勘に頼って微妙なズレがありましたのを、今回はファンファーレの楽譜を読みながら、何発もの煙火を完璧なタイミングで打ちあげたのも話題となりました。ご病状の変化で、秋の大会にはこうし

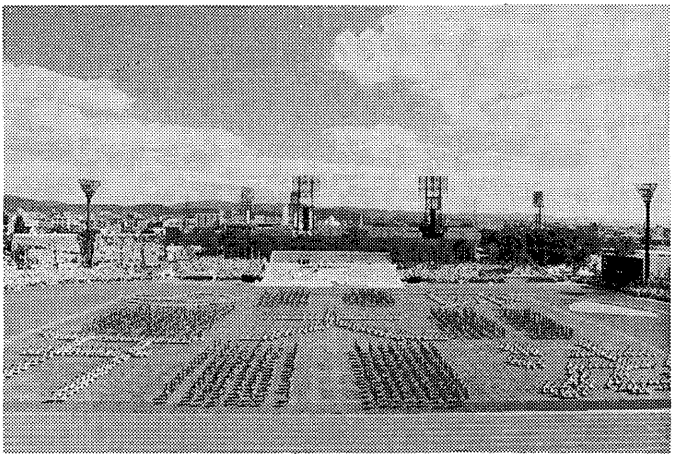
た演出効果がが中止となっただけに、感慨深いものがございます。

われわれ裏方がおります司令室。演出の機能が全部ここに集まっておりまして、アナウンス、音響関係、各ポジションとの連絡電話、通信司令用のＦＭなどの機材と配線で埋っています。三か所ありますの出場者の出入口への司令や、浩宮殿下の出発、入場、お言葉、退場をはじめ、進行の全ての指示をこの司令室から私が出しております。となりのアナウンス室へのキュー出しも、防音のガラス越しにやっています。

秋の大会の頃は、陛下のご病状が最も憂慮されていた時期でした。普通でしたら本番が近づきますと、準備ができておりましても、もう少し時間が欲しい、開会式の日がもっと先になって欲しいと思うのが人情ですが、もしご病状が変化すれば、切角何年間積み重ねた準備も水の泡となってしまいますので、何事もなしに開会式の日が来て、早く閉会式が終って欲しいと、本当に一日一日が長く感じられたことでした。

無事秋季大会の開会式の日がきました。四百人の琴と尺八による京都らしい響きでプロローグが始まります。プロローグをうけて、まず五山の送り火など京都の四季を表現する中学生のマスゲームです。そうした美しい自然から生れた京の文化を染織で代表して表す千二百人の創作舞踊です。これにジャズダンスが加わりますが、これも国体初の試みでした。

京の文化の二面性、豊かな伝統の文化に対して、近代的なハイテクノロジーの一面を、小学生



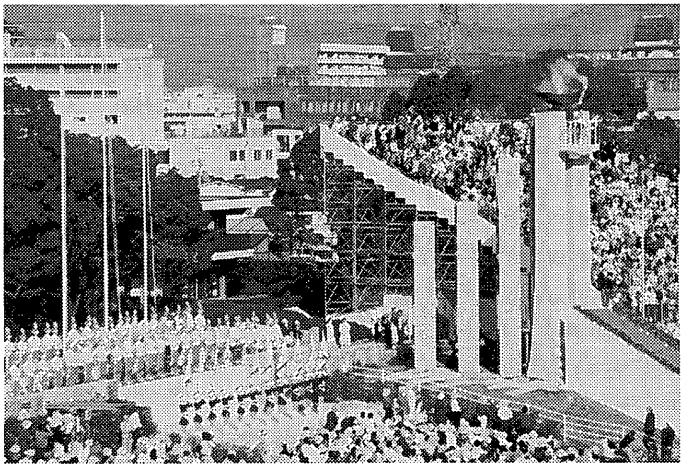
京の夏　五山の送り火を造形

がコンピューターグラフイックの演技とシンセサイザーの音楽で表現します。次に京文化の土壌となった伝承芸能とスポーツのかかわりをみて行きます。丹後地方伊根に残る「太刀振り」にスポーツ少年団の剣道がダブって映ります。次に六斎念仏、念仏踊りに心の平安を求めた姿を現代にうつして現代舞踊で〝愛〟を表現します。

民間伝承の文化をしめくくって、当初神輿の大集合を企画していましたが、神輿は江戸のもの、「剣鉾」こそ京都独自のもので、メイポールなどのポール信仰を象徴するものだ、と菅先生などのご指摘をうけて、門外不出の剣鉾出演が曲折を経て国体の場で実現しました。そうした伝統を引き継ぐこどもたちに次代を託すという構成で演技を終り式典が始まります。

京都の選手団の入場です。テーマカラーのグラデーションを使った独創的なユニフォームです。四十六都道府県二万人の全選手団を遅滞なく、しかも整然とグラウンドに入れるために、私の方からＦＭでスタートを指示しますが、やはり歩く速度の個人差で、グラウンドの行進係に修正の指示を出します。台本に記入されているキューの数が三百程あります上に、そうしたアドリブの指示が二、三百ありまして、しゃべり詰めにしゃべってなきゃいかんというような状況でした。イヤホーンをつけた百人の進行係に、文字通り問答無用、一方的に指示するわけです。

前年度の沖縄でこんな裏話がありました。スタンド最上階の司令室から見ると、入場行進のわずかな乱れでもはっきりわかりますので、演出者がガンガン指示を出します。ところが下ではなかなか状況がつかめません。行進係自身も乱れに巻きこまれて身動きができないというような状況の中で、あまりガンガンどなられるので皆イヤホーンを外してしまったそうで、おかげで開会式のハイライトの入場行進は台なしでした。私はたまたま視察に行って、この状況を司令室の中で見ていました。ですから京都の時は、私は行進係のスタッフの名前と配置図を用意しまして、○○さん、山形県の旗手のテンポを少し早くとか、××さん、福岡県のプラカード嬢に前との間隔をあけるように……ハイその位で結構です……というように個人名で呼びかけることにしました。終ってから聞きましたところ、司令を受けた方は自分の役割が注目され信頼されている、自分の仕事が成否を左右しているんだという気持になって、自信をもってリードできたということ



43階段を登ってリフトで炬火点火（秋季大会開会式）

でした。事実、司令室と現場は何百メートルと離れていて、時には姿も見えない相手に向って司令を出すわけですが、以心伝心というか、言葉以上にこちらの考えていることを的確につかんで、手足のように動いて頂きました。何でもないことですが、人と接し、人を動かすときのコツを教えられたような経験でした。

最終炬火ランナーは、第一回の折に選手で出場した朝隈善郎氏がつとめ、新しい時代に引き継ぎます。我々の三高時代、朝隈さんは体操の講師でしたが、いつもエスケープして困らせたものです。

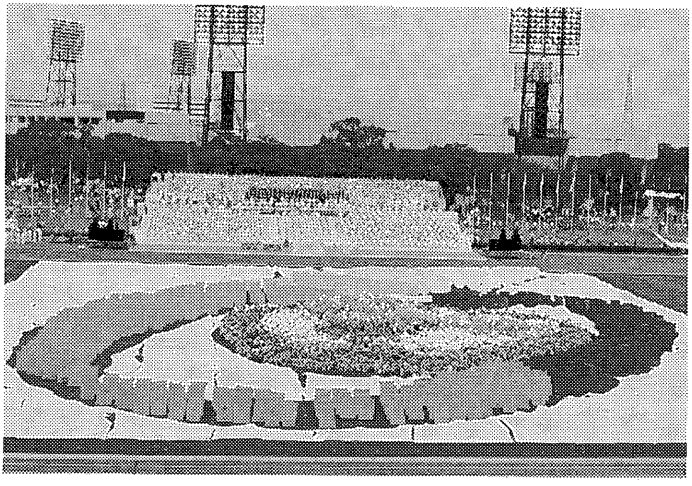
炬火台はリフトでランナーが昇ります。ソウルオリンピックが蓋をあけてみますと同じような趣向でびっくりしましたが、当然そんなことは知らずに考えられたことです。デザインコン

ぺで決った時には点火の方法まで考えられてなくて、あとになって二本柱の間を利用してリフトを昇降させることにしたという苦肉の案です。苦肉の作といえば、炬火台へ昇る階段も、芝生をカバーするためにつけたもので、出来上ったら三十九段。どうも数が気に入らない。第四十三回に合わせてあと四段つぎ足そうということになったそうです。誰も知らない、考えた人だけが得心するようなアイディアですね。

式典後の集団演技。金管バンド、合唱隊、ナレーション、一輪車やボールなどの演技集団をミックスしたもので、前にお話したミュージカル仕立てのオムニバス構成にしたかった演出プランの片鱗が残っています。子供達も楽器をもったことが初めてとあって、その訓練が大変だったようです。音が出るようになって歩き出すと今度は音が出なくなる、音を出そうとすると足が止まるということで長い間苦労したようです。

幼稚園のマスゲームでは、演技の間にグラウンドで迷子が出るんです。皆同じ色の服なものですから、自分の仲間が判らなくなる。かえってそれが可愛らしくて、高円宮ご夫妻が思わず笑い出して、拍手を贈っておられました。

高校生には最後まで手こずりました。練習会では仲々気分が乗らずピリッとしないので何度も叱りました。でもさすがにおとなですね、高校生となると。本番になりますと思わず目をみはるような出来映えで感動させられました。



4700人が描くシンボルマーク（フィナーレ）

最後に未来への橋をかけて、マーチング隊とバトントワリングで盛りあげ、四千七百人のフィナーレでシンボルマークをグラウンドいっぱいに描きます。余白の部分を一人ずつの布で埋めるつもりでしたが人数が足りません。止むを得ず広い余白部分は5m×10mの大きな布を使いましたが、大きすぎて捩れたりして苦労しました。円形の中心の幼稚園児と小学生に、自分のメッセージをつけた三千個の風船をもたせて最後に空に放そうと考えていました。国体を通じて他府県のこどもたちと対話が生れることを期待していましたが、〃自粛〃ムードの中でとり止めになり、色の紙に替りました。

演技と音楽関係の出場者一万四千人、選手団を加えますと三万五千人をプログラム通りに動かさねばなりません。それぞれのグループの動

線が鉄道のダイヤ以上の細かさで秒刻みで組まれていますので、少しずれますと混乱が全体に波及します。何万人のことですからどこかでずれが生れることは仕方ありませんが、とっさの判断で指示調整して行かねば大変なことになります。司令室の中はかなりの緊張感でした。マスタープランの策定だけで仕事は終ったと思ったのが、構成から演出、はては当日の進行係の元締と、最後まで面倒を見る結果となりました。

近藤公一君がスポーツ芸術ということで、舞台の上で演劇的な表現で非常によくまとめられました。こちらもやはり同じテーマで、文化の流れを、より肉体的な表現でグラウンドの上に組みたてたというのが「京都国体」でありまして、これから国体はどうあるべきかなんていう論議も出るかと思いますが、開催地のカラーに彩られた、スポーツを中心とした国民的祭典ということでしょう。

そのためには体育振興の底辺をひろげて、スポーツをもっと身近かなものにして行くこと、スポーツの要素である速さとか高さ、強さに美しさを加えて、広い意味で芸術文化の中でこの祭典を考えていく、各地方の個性ある文化が一堂に会し、いろいろな形で文化と文化がふれあい交流する——若ものの心に与える新鮮なショックと自覚が、この祭典を常に活性あるものに積みあげて行く——国民的イベントとしての国体の姿を考えながら、でもやっぱり変らないかもしれないななどと思いながら、二巡目初の「京都国体」とともに歩んだ三年間でした。